



小説

ふな ど よ い ち
船 戸 与 一

下関市
(1944～2015)



撮影者・吉岡一生（下関市立近代先人顕彰館所蔵）

- 【著作】
- 『猛き箱舟』（昭和62・集英社）
 - 『蝦夷地別件』（平成7・新潮社）
 - 『虹の谷の五月』（平成12・集英社）
 - ほか
- 【閲覧情報】
- 下関市立近代先人顕彰館（田中絹代ぶんか館）
において、ほぼすべての作品を閲覧可能。

船戸与一（本名 原田建司）は、昭和十九年（一九四四）二月八日、下関市後田町に生まれ、山口県立下関西高等学校を卒業した。早稲田大学法学部に入学し、探検部に所属。ここで世界の辺境や危険地帯の歩き方を学び、これが後の作家人生に大いに反映されることとなる。

卒業後に映像プロダクションを設立し、フリーのルポライターとしても活躍。「外浦吾朗」の筆名で国民的人気漫画『ゴルゴ13』（画・さいとう・たかを）の原作を手掛けたり、「豊浦志朗」の筆名で書籍を出版するなどしていた。作家への転機は昭和五十二年（一九七七）、講談社の編集者が豊浦志朗のルポ『叛アメリカ史』（プロンズ社）に目を留め、小説を書かせてみたいと再三にわたるスカウトをかけたことによる。最初は本気にしていなかったが、編集者の熱意に負けて書いた作品が『非合法員』（講談社）として上梓され、作家「船戸与一」が誕生した。

船戸は紛争地帯や未開の地を積極的に踏査し、次々と作品に結実していった。日本にとどまらず世界の実情を踏まえ、闘う反骨の男たちを描く雄渾な筆致は、文芸の分野において「冒険小説」というジャンルを確立したとも評されるほどである。

『山猫の夏』で第六回吉川英治文学新人賞、第三回日本冒険小説協会大賞を受賞、『砂のクロニクル』で第五回山本周五郎賞、第十回日本冒険小説協会大賞を受賞、『虹の谷の五月』で第一二三回直木賞を受賞。また平成二十六年（二〇一四）にはそれまでの功績を認められ、第十八回日本ミステリー文学大賞を受賞した。

平成二十一年（二〇〇九）、六十五歳で胸腺癌が発見されたが、「余命一年」の宣告の中、当時執筆していた大作『満州国演義』を書き上げるために全力を集中した。その完成とともに、平成二十七年（二〇一五）四月二十二日、七十一歳でその生涯に幕を下ろした。

（文・吉田房世）



船戸与一書斎写真（小学館提供）
『満州国演義』（全9巻／新潮社刊）を執筆中の書斎にて、膨大な資料とともに。（2011年2月／撮影者・太田真三）



直筆原稿『満州国演義』
（写真／下関市立近代先人顕彰館所蔵）
船戸作品は長編が多い。この作品は7500枚にも及ぶ超大作となった。

船戸与一 年譜

（提供・恵谷治）

昭和19（一九四四年）	一五歳	2月8日、山口県下関市において4人兄弟の次男として誕生。本名 原田建司（はらだけんじ）。
昭和34（一九五九年）	一八歳	4月、山口県立下関西高等学校入学。
昭和37（一九六二年）	一九歳	3月、同校卒業。4月、早稲田大学第一法学部入学。探検部に入部（8期）。
昭和38（一九六三年）	一九歳	8月、早稲田大学探検部韓国親善隊の一員として訪韓。日韓国交正常化以前の韓国に1か月（8月6日～9月1日）滞在。
昭和40（一九六五年）	二一歳	12月、早稲田大学第二次冬期ベリリング海峡横断隊単独越冬隊としてアラスカに滞在。
昭和44（一九六九年）	二五歳	3月、早稲田大学第一法学部卒業。
昭和49（一九七四年）	三〇歳	4月、外浦吾朗名義で『ゴルゴ13』（画・さいとう・たかを）など漫画の原作を手掛ける。
昭和50（一九七五年）	三一歳	4月、豊浦志朗名義で『硬派と宿命』はぐれ狼たちの伝説（世代群評社）を出版。
昭和52（一九七七年）	三三歳	11月、『叛アメリカ史』（プロンズ社）を豊浦志朗名義で出版。
昭和54（一九七九年）	三五歳	3月、船戸与一名義で初めての小説『非合法員』（講談社）を出版。
昭和56（一九八二年）	三七歳	1月、イランから陸路でバキスタンに入国。ペシャワールからアフガン・ゲリラと共にアフガニスタン解放区に潜入取材。
昭和59（一九八四年）	四〇歳	8月、『山猫の夏』（講談社）を出版。
昭和60（一九八五年）	四一歳	2月～3月、マグレブ、ポリサリオ戦線取材。『山猫の夏』で第6回吉川英治文学新人賞、第3回日本冒険小説協会大賞を受賞。
昭和62（一九八七年）	四三歳	4月、『猛き箱舟』上下巻 集英社を出版。第6回日本冒険小説協会大賞を受賞。4月～5月、ギアナ高地など、コロンビア麻薬地帯取材。
平成元（一九八九年）	四五歳	2月～4月、ソ連のベレストロイカ取材。クルディスタン踏破。
平成3（一九九二年）	四七歳	5月～6月、早稲田大学探検部に同行し、北方領土取材。11月、『砂のクロニクル』（毎日新聞社）を出版。
平成4（一九九二年）	四八歳	『砂のクロニクル』で第5回山本周五郎賞、第10回日本冒険小説協会大賞を受賞。
平成6（一九九四年）	五〇歳	6月～7月、中国取材（四川省、新疆ウイグル自治区、内蒙古自治区）。
平成7（一九九五年）	五一歳	5月、『蝦夷地別件』上下巻（新潮社）を出版。11月、台湾取材。メキシコでサパティスタ民族解放軍解放区取材。
平成8（一九九六年）	五二歳	1月、マイアミの反カストロ組織やキューバ取材。『蝦夷地別件』で第14回日本冒険小説協会大賞を受賞。
平成9（一九九七年）	五三歳	5月1日～21日、フィリピン取材。5月、ルポ『国家と犯罪（小学館）』を出版。6月～7月、香港返還取材（上海、南京）。
平成10（一九九八年）	五四歳	9月～10月、ロシアとウクライナでコサック、マフィア、旧KGBなどを取材。
平成12（二〇〇〇年）	五六歳	5月、『虹の谷の五月』（集英社）を出版。7月、同作品で第123回直木三十五賞を受賞。
平成13（二〇〇一年）	五七歳	10月～11月、インドネシアにおいて「9・11」直後のイスラム過激派の動向取材。アンボン島に渡航。
平成19（二〇〇七年）	六三歳	4月、『満州国演義』シリーズ（いずれも新潮社）の刊行開始。
平成21（二〇〇九年）	六五歳	6月、胸腺癌と診断され「余命一年弱」と宣告される。
平成23（二〇一一年）	六七歳	12月8日、マレーシア、タイ、シンガポールでハリマオ取材。
平成26（二〇一四年）	七〇歳	10月27日、光文社の第18回日本ミステリー文学大賞受賞。
平成27（二〇一五年）	七一歳	4月22日胸腺癌のため永眠。

血の臭いはまったく気にならなかった。

そんなものが気になるのは人間だけだ！

おれは拳ほどの大きさのシャヒーナの心臓を食いはじめた。しやりしやりという音がかすかに寝室のなかで響きだした。

孤児として育ち、世界から生きることを拒否されたシャヒーナよ、あなたはこのおれの体内で眠るのだ。ポリサリオ解放戦線の炎の女よ、おれがいまあなたに求めているのは未来に向けた夢でもなければ情熱でもない。そんなものが何で必要だろう？ おれが欲しいのは、シャヒーナ、たったひとつしかない。あなたの無念さと合体したいのだ。だから、こうしてあなたを食ってる……。

おれはシャヒーナの心臓の最後の肉片を呑みこんだ。それから、死体にシャツとブルゾンを着させて抱えあげた。裏庭に埋めるつもりだったのだ。踵をかえたそのとき、ガラス窓におれが映っているのが見えた。

その面影は香坂正次と戸籍に記された男のものではなかった。風の又三郎と名乗った男のものでもなかった。

そこに唇を血で汚して映しだされているのはどう見ても人間ではなかった。シャヒーナの心臓を食い終えた瞬間に残っていた感情が消えていったのだ。ガラス窓に映っているのは亡霊でしかなかった。

それが死体を抱えて動き出した。

原文抜粋（『猛き箱舟』）

船戸与一